

---

# 恋からみつけた妙な縁

伊達倭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋からみつけた妙な縁

### 【Zコード】

Z3209E

### 【作者名】

伊達倭

### 【あらすじ】

鷹成誠一と雪吹実代が交際を開始してから二年。一人は今も尚、恋人として仲良く過ごしている。そんな二人の前に、親友と呼べる男、不破俊彦が現れるのだが、「本からみつける恋の文字」の外伝です。

趣味を読書と答えるようになつて、一体どれほど経つただろうか。文字を覚えたのは幼稚園に入る前で、絵本は幼稚園の年少組で卒業したらしい。小学生になる頃には通り一遍の漢字を覚えていたようで、欲しいものを尋ねられると、決まって「面白い本」と答えていたようだ。

母は、幼い我が子が難解な小説を読み解く様を見て、神童だと喜んだが、生憎と神童どころか、優秀ですらなかつた。漢字の読み取りだけは、どんなテストでも間違えたことはないが、それ以外に目立つた結果を残していない。

市立中学から、中堅どころの県立高校に。その次は、私立の四年制大学へ。可もなく不可もなく、というところだろうか。大学に進むにあたり、兄弟が多い僕は学費が心配だつたが、幸いにも年の離れた兄が学費の面倒を見てくれることになり、無事に進学と相成つた。

三年間、通い続けた高校を卒業したのが三月。下宿をすることになつた僕は、四月までの間を引っ越しの準備に追われた。

兄が一人暮らしをしていた時のお古などを譲り受けたおかげで、せいぜい、衣類や趣味のものを荷詰めすればいいだけだつたのだが、その趣味のものが、如何せん手強かつた。

勿論、本である。一体、自分でも何冊あるのかわからない本の山を、全て持つていくわけにはいかなかつた。軽く見積もつても一千冊はあるのだ。僕は泣く泣く、百冊ほどを厳選して段ボールに詰めた。

こうして、僕は大学生として生活するために、はじめての一人暮らしを始めることになつた……わけではなかつた。

「ふむ。まさか、本当に『』となるとはな

引っ越しを終え、一息ついたところで、雪吹実代が相変わらず不敵な笑みを浮かべていた。荷物自体はそれなりに多かつたが、実代の両親に、僕の両親や姉。さらに弟たちを駆り出した結果、僅か数時間で全てが片付いてしまった。既にお互いの家族は帰路に就いており、今は僕と実代しかいない。

「本当にね。今でも少し不思議だよ」

僕は苦笑して、今日から暮らし始める我が家を見た。

地方の大学ということが幸いしたのか、地価が安く、家賃六万円にして一戸建ての借家を借りることが出来た。リビングに個室が二つ。後はトイレに台所に風呂という平屋であるが、僕たちはこの家を大層気に入っていた。

まず、一つめの理由として、静かであること。大学からは自転車で十分ほどなのだが、住宅街の外れがあるので、夜は基本的に静かで、心ゆくまで読書が楽しめる。

次に、かなり古い物件だということ。純和風のこぢんまりとした家で、何とも言えない叙情感がある。古くさいと言わればそれでではあるが。

最後に、小さいながらも縁側があるということ。四月に入つたばかりの今では少し肌寒いが、もう一月もすれば、裸電球でも天井にくくりつけて、風流な読書と洒落込める。

「一年前の約束が、ようやく叶つたというところか。我が両親ながら豪気なものだ。もつとも、一年も関係が保つまいとでも踏んだのだろうが、生憎と誠一は一年で私に見切りをつけるほど、賢くはなかつたというわけだ」

「我ながら賢いと思つてゐるよ」

文芸部存続のために交際をはじめてから、一年。付き合つて二ヶ月で文芸部は潰れてしまつたが、僕たちの関係は潰えなかつた。恋人という名目から始まつた関係も、実を伴い、それに併せるように感情も芽生えていった。今は胸を張つて恋人と言える。僕たちだけの定義での恋人ではあるが。

「ふむ。お互にバカなりに、賢いといつといろが」  
「バカだから、賢いってところかな」

世間一般的の恋人という定義に、無理に自分たちを当てはめなかつたのは賢い選択だったと、今は思う。色々な問題を蹴り飛ばして恋人になつたあの日。そして、遠回りをして本当の恋人になつていつたあの時間。バカだったから、そんな無茶もできた。

僕と実代の同棲を両親が認めたのは、幾つかの条件をこちらから提示したからだつた。

- 一つ、個室をそれぞれ持つこと。
- 一つ、金銭の貸し借りをしないこと。
- 一つ、破局の際は、新居などの段取りを自分たちで済ませること。
- 一つ、きちんと大学を四年で卒業すること
- 一つ、妊娠させないこと。

これで良しと言つた両親は、割と変人なのだろう。ただし、どうせ同じ大学に進み、お互の家へ宿泊したりするのだろうから、このような宣言をするだけ、同棲のほうがマシだという判断なのかもしれない。実代のほうは流石にけつこう揉めたらしいが、最後は実代の一言が決め手だつた。

「父さんは、母さんと同棲していたといつじゃないか。二人の娘である私が、それを望むのは、もはや因果だ。責任は一人にある」その後、僕が両親共々挨拶に出かけた折に、実代の父が僕を見て「もう俺の手には負えない。君には苦労をかける」と悔しそうに呴いたのは、きっとそのためだ。以来、実代の父はたまに僕を誘つて外食を摂つてゐる。

「なんで、あんな子に育つてしまつたんだろう」

「感謝します」

「俺こそ、風変わりな娘を好いてくれてゐる誠一には感謝してゐる。

「この際だから、もう父親と呼んでくれてかまわない」

お養父さんと呼ぶのも不思議な気がして、親父さんと呼んでみたら、いたく気に入られた。

「実代の何処が好きなんだ？」

楽しそうにそんなことを聞いてくる親父さんはやはり、義理の父というより、年の離れた友人というほつがしつくりきた。僕の答えは 恥ずかしいので思い出さないようにしている。

居間で実代と珈琲を飲みながら、これからについて少しだけ喋つた。

大学は明日からはじまる。そろそろ夕飯という時間だが、一日で引っ越しをしたのだから、それなりに疲れている。店屋物か外食をしようということになった。

「どれ。一人で味気ない夕飯というのも可哀相だろ？ 不破も呼ぶか」

「そうだね」

実代の言葉を受けて、僕は携帯電話を取りだした。不破にかけてみると、やや疲れた声が聞こえてくる。

不破も、明日から同じ大学に通うことになっている。国立大学を受験したが、見事に落ちてしまった不破は、浪人することなく、第一志望である、私立 僕と実代が第一志望とした大学へ進むことを決めたのだ。

『こちらも、今日引っ越しを終えたばかりでね。夕飯をどうしようかと思つていたところだ。そちらに伺うので、店屋物でも頼んでおいてくれ……ああ、引っ越しを手伝ってくれた人も連れて行くので、二人分の追加としておいてくれ』

不破にも手伝いがいて、まだ一緒にいたのならば、余計な節介だつたかもしれないが、今更「やっぱり来るな」とも言えない。苦笑しながら、近くの蕎麦屋の出前を四人分頼んだ。

卒業以来会っていない不破だったが、たかが一ヶ月でさほど変わらはずもない。相変わらずの銀縁眼鏡に上品な面構え。ただ、一つだけ予想外だったのは、不破の引っ越しを手伝ったという人間が、同年代の女の子だったということだ。

「紹介するよ。嘉納妙<sup>かのうたえ</sup>といふ。この二人は、鷹成誠一と、雪吹実代。皆、同じ大学に進む新入生だ」

嘉納さんという女性は、小柄でとても愛くるしい人であった。亞麻色の髪はセミロングで、ふわふわとした猫つ毛。ぱつちりとした目元は子犬のようである。

「俊彦君と同じ高校のお二人ですね。お話を聞いてます。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げた嘉納さんに、僕と実代はやはり頭を下げて返しながらも、とても不思議な印象を受ける。俊彦君とは、やはり不破のことだろうか。

「嘉納さんは、不破と？」

実代が躊躇うことなく、二人の関係を尋ねる。不破は苦笑しながら肩を竦め、ぽんぽんと嘉納さんの頭を撫でた。

「まあ、お察しの通りだよ」

この展開には、流石の実代ものけぞった。

「夏休みに、予備校に通っていたのだけど、そこで知り合つてね。秋口あたりから付き合つていたのだが……そういうえば、二人には言つていなかつたな」

四人で蕎麦を食べながら、不破と嘉納さんの馴れ初め話を聞いていた。

不破が実代に告白してから一年が経つ。いつの間にか不破は、実代とも友達と呼べる関係を築いた。

しかし、全く未練を捨て去れたわけでもないだろう。不破は端正な顔立ちをしているし、少々堅苦しいところはあるが、中々の弁舌の持ち主だ。波長さえ合えば、恋人を作ることぐらい容易いのでは

ないかと思う。

そんな不破だから、今まで浮いた話がないことが疑問で、実代への想いを消し去れずにはいるのではないかと考えていたのだが、考え過ぎだつたようだ。それとも、やはりあの日以来、綺麗さっぱり想いを断ち切つたのだろうか。

「水臭いな。教えてくれても良いだろ?」

「かつての想い人へ、恋人ができたと報告するのも、なんだか妙な話だと思ってね。鷹成には言つてもよかつたが、君たちはどうにも二人組で行動することが多い。いずれ知れるだろ?」と思つていたら、卒業してしまい、今になつたというだけだ」

実代の言葉に、不破は堂々と「かつての想い人」という言葉を用いて返した。不破の隣に座る嘉納さんは特に驚くふつもなく、にこにこと蕎麦を啜つてゐる。

「なるほどね。連れてくるからには、ややこしい事態にはしないといつわけか」

僕が言つと、不破は肩を竦めて頷いた。不破は既に、かつて実代を好きだつたことを嘉納さんに伝えてからここに来たのだろう。そのような会話ができるほどの信頼関係が一人にはあるということだ。不破と僕たち。それに嘉納さんは同じ大学に通うことになり、否が応でも会つ機会はある。何らかの拍子で偶然、嘉納さんが知るよりは、最初から自分で言つておいた方が後腐れがないのだろう。

「手放しで喜べることじやないんですけどね。けど、俊彦君はそういう話を隠さないだけマシですし……雪吹さんを見ると、ああ、タイプなんだなって解ります」

嘉納さんは肩を竦めるかわりに、呆れたよつた溜息をついたが、実代の顔を見てにこりと笑つた。実代はその様子を割と神妙な顔で眺めていた。

「女の私から見ても、雪吹さんは綺麗です。ほんと、俊彦君を口説くのが大変だつた理由がわかりましたよ。お茶に誘つても、珈琲を一杯飲んだらすぐに帰ろうとするし……」

「嘉納女史こそ、羨ましいほどに可愛いではないか。不破は女心など解する人間ではないし、誠一も似たようなモノだ」

からからと笑うそれぞれの恋人を見て、僕と不破は苦笑を禁じ得ない。

女の子同士の会話というのは、横に座っている男にすれば非常に間の悪いものだ。最初はどうなることやらと思ったが、嘉納さんと実代は仲良くなりそうだ。

「同学年ならば、敬語も要らんだろう。どれ、折角だから妙<sup>たえ</sup>と呼ばせて貰おうか」

「じゃあ、私も実代って呼ぶね」

否、既にすっかり仲良くなっていた。

「それにしても、不破を口説いたと言つていたが、是非そのあたりの話を聞きたいものだな」

蕎麦を食べ終わり、僕が珈琲を沸かしている間に、三人はのんびりと居間で談話と洒落込んでいた。

「そう大した話でもないさ。そもそも、僕は口説かれた覚えがない」  
不破は僕のほうを見ながら、アイコンタクトで助け船を求めてい  
るが、僕はそれに気付かない振りをする。理由はとても簡単で、僕  
も興味があるからだ。

「ほんと、大変だったよ。俊彦君から話しかけてきたから、私に興  
味があるのかと思ったのに、全然ハズレ」

嘉納さんは当時のこと思い出したのか、呆れたように不破の顔  
を見た。

「予備校の夏期講習で、参考書ではなく小説を読んでいたら、氣に  
なるだろう。その小説が、僕も愛読しているものであれば、尚更だ。  
読書仲間は多いに越したことがない」

不破は諦めたように溜息をついて、言い訳のような言葉を口にし  
た。ただ、それが本音であることが僕にはわかつてしまう。この男  
は、恋敵とも友達になろうとするのだ。共通の本を読んでいるのな

らば、もう既に友達のつもりだった可能性すらある。

仮に、同じ場所に僕がいたら、声はかけていなかつただろう。不

破の社交性の為せる業だ。

「妙はさぞかしモテるのだらう。本を口実に寄つてきた男も多いのではないか？」

僕が珈琲を運んで、それぞれの前に置くと、実代は嬉しそうにカップを手に取り、しかし口を付ける前にそう言つた。確かに嘉納さんは言い方こそ悪いが、男受けが非常に良さそうだ。

「予備校の夏期講習で、三回ぐらいかな。俊彦君以外だと」

それが多いのか少ないのかはわからない。ただ、僕が高校生の頃、教室で本を読んでいるときに、誰かに声を掛けられた記憶はない。

「成る程。それで、僕もその類と思われた訳か」

「まさか、格好いいなあつて思つた人に限つて、小説の話しかしないとは思はないでしょ。驚くよりも悔しくて、私から話しかてるうちに、ね」

何とも不思議な縁である。小説がきっかけで恋に落ちるとは。

ただし、それ以上に妙な縁で結ばれている僕と実代である。風変わりだとは思うがさして驚いたりはしない。

「まあ、後は自明の理というやつだろう。お妙は容姿も良く、読書好きの上に、何かと突っかかってきて飽きない。口説かれた覚えがないのは、こちらから口説いているつもりだったからさ」

「俊彦君から口説かれた覚えなんて、こっちこそないんだけどね」

嘉納さんはぼやくが、多分、不破は本氣で口説いていたと思う。社交的な不破だが、真面目になればなるだけ、言葉は堅く、単調になつていく傾向がある。きっと、クソ真面目な顔をして「君は興味深い人だ」なんて言つていたのだろう。

それはそうと、不破の嘉納さんへの呼び方だ。お妙とはこれ如何に。江戸時代の町娘でもあるまいに。時代錯誤もいいところだが、そんな呼び方をする不破が僕も実代も大好きだ。その呼び方を甘んじて受け入れている嘉納さんも、おそらく僕たちと趣味が合うのだ

る。つ。

まつたく、この一年間で親しくなった人間は、みんな読書好きの変わり者ばかりである。かくいつ自分もそうなので、類は友を呼ぶとしか言い様がない。

「まあ、私たちの話はいいじゃない。それよりも、俊彦君から色々聞いてるよ。鷹成君と雪吹さんのこと」

突然、嘉納さんはそれまでの流れを打ち切り、僕たちの顔を見て楽しそうに言つた。

僕たちの恋愛などあまり他人が聞いて楽しい話とも思えないのだが、僕たちの年代が他人の恋愛に興味を示すことは知つていて。

それにもしても、僕たちの恋愛は何もない。付き合つてすぐの頃は、やはり戸惑いもあつたし、そもそも恋愛という感情が湧いてこなかつた。不破が実代に告白して、危うく別れそうになつたり、文芸部が潰れてしまつたり。それなりの事件はあつたが、その後はもう、本当に穏やかなものだつた。文芸部室改め資料室で本を読み、休みの日には一人で出かけたり。今でこそ、大学入学と同時に同棲という暴挙には出ているが、それも僕たちの関係が穏やかすぎたからだる。つ。

一緒に暮らしても、きっと喧嘩すらしない。そんな僕たちの恋愛が、どう面白くなるとこいつのだろうか。すっかり肺炎に罹つてしまつていて、おそらくもう立つて歩くことすらできないレベルだろうに。

「私たちは、妙な事態から恋愛に発展した程度で、そして面白くもないが」

実代も同じ気持ちだつたようだ。付き合う前から考えていることは似たようなものばかりだつたが、一年も一緒にいると、ますます似通つてしまつららしい。

「すごく楽しいよ。なんていうかな、私にとつては、特に」「ふと、嘉納さんは目を閉じて、静かに微笑んだ。

それまでの和やかな雰囲気が、急に澄んだものに移り変わつてい

く。ふと隣を見ると、不破も何かを考えるようになり、遠い目をしてぽんやりとしていた。不破には、少なくとも思い当たる節があるのでない。

僕と実代の恋愛。それが一体なぜ、嘉納さんこのよしやうな表情をさせるのだろうか。嘉納さんはさすと微笑んだまま、祈るように動かない。

「……嘉納さんことひては？」

僕が尋ねると、嘉納さんではなく、不破がゆづくつと頷いた。「楽しいといひより、嬉しいと言つたほうがいいと思つがね。まあ、お妙の中での話だ。気にすることもないや」

不破はそれだけを言つて、嘉納さんを真似るよしやうに、さつと目を瞑るのだった。

いたさか生徒会に熱を入れすぎた所為だらうか。任期を終え、晴れて一生徒に戻った頃には、既に周囲は受験ムード真っ只中であり、雰囲気においても、学力においても僕は一步出遅れた。夏休みに入り、予備校の夏期講習に参加して、少しでも遅れを取り戻そうと必死であるが、中々そう上手くはいかないものだ。気が緩むと、ついつい今までを振り返ることばかりをしてしまう。

生徒会長として過ごした時間は、楽しかった。その中でも特に、資料室作成の提案はどんな仕事よりも印象に残っている。

文芸部が潰れるのは、鷹成や雪吹さんだけではなく、僕にとっても辛いことだつた。

一切の過去を水に流して、鷹成と友達になろうと決めたあの日から、僕は自分にできることは、文芸部を存続させることだけだと考えていたからだ。

各部活動からの「反発は思った以上に強かつた。実績を出さず、おまけに一人きりの部員が恋人という関係にある。叩く理由は幾らでもあつたと言つて良い。いくら生徒会長だからといって、僕個人がどれだけ存続を唱えても、覆ることはなかつた。

『恋』というタイトルの小説を買った日。鷹成たちには秘密だったが、実はこつそり、僕自身が文芸部に入部していた。理由は至極簡単で、僕も感想文を提出するためにである。

部員が賞を取ればいいのだから、頭数は多い方が良い。少なくとも、恋をはつきりと捉えることの出来ない一人よりも、多少なり自分の中に恋愛の定義を持つ僕のほうが、まともな感想文を書けるだろうと思つた。僕が賞を取れば、それを文芸部の功績にしてしまえばいい。そんな単純な発想だつた。

しかしながら、やはり僕の感想文も賞を獲ることはできなかつた。あわよくばと思っていた程度なので、さして期待していたわけでも

ない。出来ることは、全部しようと思つただけだ。

他にも、部長連中の中でも、仲の良い人間に説得を試みたり、色々としてはみたが、芳しい結果は得られず、廃部は決定してしまつた。思い切つて即刻廃部にしたのは、勿論、相応の理由があつた。体育祭の準備で生徒会、各部活動が忙しくなる時期。その時期に、文芸部の廃部の標準を定めた。運動部は軒並み手伝いに駆り出され、文化部の中でも活動が旺盛な放送部や写真部などは、体育祭のスケジュール進行と、撮影を頼んで封殺。

資料室の作成に対しても文句の出る環境を、徹底的に減らした。生徒会幹部も、それに仕事を割り振り、ほぼ独断専行という形で無理を通したのだ。

協力してくれたのは、吉野先生。鷹成と雪吹さんをいたく気に入っている吉野先生は、僕の職権濫用とも言える行動を笑つて許した。教師としてどうかとは思つが、先生の言葉を聞けば、成る程と納得してしまつた。

「日本語の面白さを知る人、少なくなつちゃつてるでしょう。私が国語の教師になつた理由は、少しでも日本語を楽しんでもらいたいから。文章の素晴らしさに、気付いてもらいたいからなの。本を読む場所が学校しかないのなら、私は教師としてよりも、一人の読書家として彼らを応援したいのよ」

資料室の管理を鷹成達に任せ、その指導役に吉野先生を推挙するも、こちらもやはり体育祭の進行に忙しかつた教師達は、まるで面倒を放り投げるよう、僕に任せてくれた。

全ては、思惑通りだつたと言つて良い。最大の難点は、果たして鷹成と雪吹さんが甘んじて僕の提案を受け入れるか否かだつたが、まったくの杞憂だつた。

あの一人は、あれで非常に貪欲だ。そもそも、鷹成は理想の読書環境を手に入れるためだけに文芸部を半ば私物化していたほどなのだ。

流石に、他の部からは不平が漏れたが既に後の祭りである。僕の

独断専行を罵られたが、図書室に収納しきれない本があつたことも事実であり、慌ただしい時期ではあつたが、きちんと正規の手順も踏んだ。僕の評価はかなり落ちたようだが、鷹成と雪吹さんは思つていた以上の本好きで、資料室の創設にあたつての各種作業を完璧にこなした。結果、人選に間違いがなかつたことの証明になり、最終的にはマイナスを取り戻して釣りがくるほどになつた。

万事は、上手くいった。一時期とはいえど、鷹成に雪吹さんとの別れを決意させてしまった贖罪は、これで十分だつたと思う。

予備校の夏期講習は、言つてしまえば勉強なので面白いとは思えない。勉強 자체は決して嫌いではないのだが、それはあくまでも、目的がない場合に限る。

大学受験のため。輝かしい未来のため。そんなことを考えていては、勉強が単なる手段にしか思えず、そこに本来あるべきの知識欲や好奇心が軒並みかき消されていく。

ノートを取りながら、昔のことばかりを思い返している僕は、おそらくは第一志望に合格することは出来ないだろう。元々、両親の希望という程度の大学なので、僕が困ることはない。むしろ、僕の中では第一志望こそが本命である。

「不破君、消しゴム貸して」

「ああ」

隣の席で、懸命にノートを取つてゐる嘉納妙に小声で話しかけられて、僕は意識を現実に戻した。

筆箱から消しゴムを取りだして渡すと、嘉納は嬉しそうに頷いてノートにそれを擦りつけた。仕草のひとつひとつがちまちまと小動物のようであり、小柄な体躯に可愛らしい顔つきも相俟つて、中々魅力的な女性である。

比較するのも極めて失礼であるが、雪吹さんとは正反対の女性だと思う。如何にもクールビューティーという言葉が似合いそうな雪吹さんと、小柄で愛くるしい、敢えて横文字であらわすならば、キ

コートな嘉納。

たつた一つ、共通することと言えば読書好きといつことぐらいだろ？。夏期講習には多くの人間が参加しているが、休憩時間に参考書ではなく小説を読んでいるのは、嘉納と僕だけだった。

チャイムが鳴る。今日の授業は全て終わりとなる。

「不破君。喫茶店寄つて帰る」

「ああ、そうするか」

最近は嘉納と一緒に帰ることが多くなつた。この見かけによらない文学少女はアルバイトでもしているのか、喫茶店を読書の場としているらしい。週に四度は通つてているというが、よくも小遣いが保つものだと思つ。

挙げ句の果てに、僕の分までいつも払つだから、アルバイトなどではなく、単に金持ちのかもしぬなかつた。甘んじて僕が彼女に珈琲を奢つて貰い続けているのは、金が無いからだ。今月は小説を買ひすぎて、金欠なのだつた。

「毎度、すまないな」

「いいからいいから」

嘉納が行きつけにしている喫茶店に入ると、大体そんなやりとりがはじまる。しかし、その後は続かない。僕も嘉納も鞄から小説を取りだして、しばし読書をするためだ。そして大抵は、そのまま帰ることになる。

これでは、鷹成と雪吹さんと同じだ。そんなことを思わないでもないが、彼らの理想的な読書環境が資料室であることに對し、僕や嘉納は喫茶店であるだけだ。特に、夏場は冷房の効いた喫茶店ほど心地よいものはない。

小一時間ほどお互いを完璧に無視する形で本を貪るように読んでいた僕たちだが、小休止にと、珈琲に口を付けたところで、嘉納も顔を上げて、僕を見てきた。

「どう、その本。面白い？」

「ああ。以前、色々な縁で手に取つた本があつて、その作者が最近書いた本なのだけどね。重厚な文章であるにも関わらず、非常に小気味の良いテンポで読める」

「ふうん」

嘉納は僕の手元に目をやり、文庫本の表紙をじっと見つめた。彼女は、僕が勧めた小説を読んだことがない。尤も、一度ほどしか勧めていないので、勧められるのが苦手なのか、好みではないと判断したのかはわからない。それでも、改めて勧める気にならないのも確かである。

「嘉納は、どんな本を読んでいる？」

「今は夏田漱石。すこいよ、現代でも違和感のない文章で、すぐ鮮やかに読めてしまうの。それって、それだけ綺麗な日本語つてことで、なんだか悔しい」

中々、不思議な言い回しだ。綺麗なことが悔しいと言う嘉納は、自分自身が綺麗な容姿をしていることに、多分気が付いていない。

「君は興味深い人だな」

そう言うと、嘉納は呆れた表情で僕を見た。

僕と嘉納はいつも、隣の席に座つて夏期講習を受けていた。

友達だからといつシンプルな理由は、いつの間にか建前になつていたのだが、それに気付かないフリをした。読書好きで、どこか飘々とした嘉納は、まったく正反対であるはずの雪吹さんに、何故かだぶつてしまつたからだ。

別に、自分が気の多い人間だとは思わない。ただ、思春期を抜けきらない年頃であり、身近に可愛らしい女の子がいて、どうやら彼女もこちらを憎からず思つているらしい。

そこまでお膳立てされている状況では、意識してしまつのは仕方のないことであり、一旦意識してしまつと、今までとは違う意味で受験勉強に手が着かなくなつてしまつた。

「どうやら、君に惚れているようだ」

「下手くそな告白だね」

「よく言われるよ」

そんな短いやりとりが交わされたのは、夏期講習の最後の日だった。

連絡先の交換ぐらいは済ませており、まさか一度と会えないわけでもなかつたが、嘉納に会う最も大きな口実が無くなつてしまつことに違いはなかつた。

無くなるなら、別を作ればいい。

文芸部は潰れたが、資料室ができた。ならば、夏期講習が終われば、否、友達の期間が終われば、恋人になれるかもしれない。最後になるかもしれない喫茶店での会話は、自分でも呆れるほどに唐突な愛の告白だった。

「あれだけ本を読んで、そんな言葉しか出てこないって、不器用だねえ」

「不器用というか、これでも緊張しているんだ」

「それは見えないけど」

けらけらと笑う嘉納の頬に朱がさしてこることには気付いていたが、僕は何も言わなかつた。緊張していることを隠すことに必死だつたし、指摘すると多分、怒る。

「……私も、惚てるよ」

やがて咳かれた彼女の言葉を、僕は一生忘れないと思つ。

## 過去から繋がる妙な縁

嘉納妙。小柄で、ふわふわとした亞麻色の猫つ毛が特徴的。ぱつちりとした瞳に、少し低い鼻。鈴が鳴るような愛らしい声に、ころころと変わる表情。可憐な美少女というイメージ通りではあるが、落ち着いた場所にいると、驚くほどに淡々とした口調になる。

それは裏表があるというわけではなく、気が抜けているだけなのだろう。どちらも嘉納の本当の姿であるし、どちらの嘉納も好きなのだから、せしたる問題には感じなかった。

それに、人間といふのはそういうものだとも思つ。鷹成にしても、普段は穏やかすぎるほどに大人しいのに、好きな小説について語らせるど、こちらが億劫になるほど長々と喋る。雪吹さんは冷静沈着だが、逆鱗に触ると、眼光だけで気圧されるほど怒氣を孕む。僕だつてそうだ。落ち着いて行動が出来ると自分で思つてゐるが、いざ取り組むとなると、ひどく不器用で、がむしゃらになつてしまふ。

嘉納は、オンとオフの切り替わり方が激しいだけだ。気性が激しいわけではなく、気の性質自体が切り替わるという、少々人とは違う変化であるから、そのギャップに戸惑つ。それだけのことだと思う。

「デートをしたいと思うのだが」

「もう少し、雰囲気とか無いかなあ。こう、ちょっとくらこキザでいいからさ」

「君といふと、とても心が暖かくなるんだ。君を、一日中独占したいといふとすら思つ。この願いを、叶えてはくれないだらつか」

「文学的すぎて嘘くさいよ」

恋愛とは難しい。デートの誘い方一つにしても、言い回しが重要らしこ。

自分でももう少し、さりげなく誘いたいのだが、ついつい堅い言葉か、ぐどいぐらいの言い回ししかできなくなる。

「次のお休み、ずっと一緒にいたいね。そんな言葉ぐらいでいいの」「じゃあ、一緒にいよう」

僕の言葉に、嘉納はこめかみを人差し指で押さえて「なんで俊彦君に惚れちゃったのかなあ」と呟いた。何故と言われても困る。僕も嘉納に惚れるつもりは無かつたし、惚れられるつもりもなかつた。気付けば惚れただけであり、それをそのまま告白したまでだ。それを受け入れたのは他ならぬ嘉納自身であるから、最早、自業自得としか言い様がない。

「諦めるしかないのでは?」

「……ほんと、諦めるしかないね」

また不味いことを言つたらしい。嘉納の表情は呆れるを通り越して、神妙なものになつていた。

「それで、デートなのだが。来週の日曜は丁度、予定が無い。そちらさえよければ、この日にしたいと思うのだが、どうだろ?」「だから、なんで会議の予定を決めるみたいに言つかなあ。もつといひ、理詰めじゃなくて感情的になつていいんだよ?」

今度は逆に、嘉納が笑い出した。僕が相當におかしなことを言つたようなのだが、生憎と恋人をデートに誘つた経験など無いので、どこがどうおかしいかもわからない。嘉納のいうように、会議の日程を決める作業は僕の仕事だったので、割と得意だとは思つ。ただ、感情に従つて良いのであれば。

「やはり、今から出かけよう。喫茶店で喋るのも良いが、君と今すぐ手を繋いで歩いてみたい」

「……急に、ズルいよ」

不意に頬を染める嘉納が愛らしくてたまらない。

割と順調に進んでいる僕と嘉納の関係を、そろそろ鷹成あたりに報告しても良いんじゃないだろうか。そう思ったのは文際してから

「一月ほど経つた日のことだつた。

「友人に言おうと思うのだが、いいだろうか?」

「別に良いけど。なんでそんなこと、聞くの?」

「関係を隠したいという人間もいるからな」

「ふーん。そういえば、俊彦君の友達つて、どんな人?」

「何気ないやりとりだつた。

「鷹成という親友がいてな。その恋人の雪吹さんという人もいるのだが、この一人が一番、仲が良い」

「僕は一人との出会いを説明した。

僕が、雪吹さんに思い焦がれていたことも、鷹成が恋敵だつたことも。

嘉納は少し眉をひそめたが、僕が既に雪吹さんに未練などないことがわかつたのだろう。最後には笑顔だつた。

「興味あるなあ、その二人」

「だろう。この二人の馴れ初めを聞けば、尚更面白い」

隠すことでもないだろうと思い、鷹成と雪吹さんが恋愛感情を知らず、それを知るために交際に至つたことから、順に聞かせてやつた。

『恋』という一冊の小説からはじまつた、妙な恋愛譚。僕とてその全てを知つてはいるわけではないが、一番冷静に、それでいて多くを知つてているのは僕だけだつた。この物語を語らせる人間としては、おそらく僕が一番相応しいと思う。

最初は興味津々で聞いていた嘉納だが、やがて神妙な顔になり、無事に資料室を彼らの根城に据えたところまで話すと、思い詰めたような顔になつていて。

「嘉納?」

つまらない話ではなかつたと思う。嘉納の恋愛観にはそぐわなかつたのだろうか。

それにしては、最初の方は随分と楽しそうに聞いていたように思えたが。

「……『恋』から、その一人が付き合つことになつたんだよ、ね？」

「ああ。前にも言つたろう。色々な縁で手に取つた本がある、と。

ひょつとして、嘉納も読んだことがあるのか？」

「読んだことは、そりやまあ、あるけどわ」

「どことなく歯切れの悪い嘉納に、僕は訝しんだ。『恋』を読んだことがある人間自体は、さほど珍しくはない。読書好きなら尚更である。中には、肌に合わなかつた人間もいるだろ？」

「あまり好きな話ではなかつたのか？」

「……んー、嫌いなわけはないんだけど。何で言うか……」

ひどく狼狽える嘉納に、僕も少々混乱した。さては、不味い話をしてしまつたかと思い、どう打開すべきかと焦る。しかし、そんな僕を尻目に、嘉納はぽろりと一滴の涙を、瞳から伝わせた。

「ど、どうした！？」

「な、なんでもないつ……」

言葉とは裏腹に、嘉納の涙は止まらなかつた。僕はもう、何がなんだかわからなくて、ハンカチを彼女に渡して、黙つているしかなかつた。

やがて落ち着いた嘉納は、真つ赤な眼を擦りながら、ぽつぽつと語り始めた。

「感想文の企画を聞かされたときは、正直、驚いたんだよね。けつこう評価が高いって言われてることは知つてたけど、まさかそんな企画が立ち上がるとも思つて無くて」

『恋』の感想文企画のことだろう。嘉納も提出したのだろうか。今の口ぶりからすれば、『恋』を前々から知つていたようではあるが。

「手紙、けつこうも、うつてたんだけど、それだけでけつこう怖かつたんだ。恋愛について深く知つてゐるみたいに思われていて、相談を受けたり。年齢も、性別も伏せていたから、割と男の子から多く相談を受けたの。ときには、自分よりも年上の人からでさえ」

ちょっと、待ってくれ。

口からその言葉が出すに、僕は手で話を遮った。

今のは、何なのだ。一体、誰の話だ。

彼女の言葉が、彼女自身の体験であるとするならば、まるでこれは。

「……改めて自己紹介をするね。『恋』の作者で、伊達倭だてじすかです」

嗚呼、なんという偶然なのだろう。

僕は驚くことすら忘れて、ただただ呆然とするばかりだった。

「私、これでもけつこう人気があつたんだ。えつと、小説じゃなくて……要するに、モテてたの」

ぽつぽつと語る嘉納は、決してそれを自慢しているわけでもなく、ただ単に事実を述べているだけのようだった。

実際、嘉納の容姿は魅力的だと思う。人当たりも良い。モテないと言われた方が嫌味になる手合いだ。

「俊彦君に喋りかけられたときも、またかつて感じだつたの。けど、自己紹介されて、不破つて名前を、どこかで見かけた気がしたの。まさか、自分の書いた小説の感想文に、応募してたなんて思わなかつたけどね。数百も来た感想文を、一つずつ読んでたから、名前まで一々覚えていなかつたし、一年も経つてたし……それでも、印象に残つた感想文だったから、微かに覚えてたのかもしれない。いきなり小説のことばかり話すこともあつたけど、不破つて名前が、心に残つてたから友達になつたのかもしれない」

ふと、一年前に提出した感想文の内容を省みる。

思春期の恋愛というテーマに真っ向から取り組んだ小説の感想文は、得てして自分の恋愛との比較や、主人公への共感が大半を占めると見て、少々奇をてらつた。

僕が書いたのは、鷹成と雪吹さんについてだつた。恋を知らない二人が、この小説を契機に恋に取り組むようになったことを、少し

だけ色づけして、書いた。

『恋』には、誰かを幸せにする力がある。そういうことを書いたことを覚えている。

「随分と面白い感想文だったよ。特別賞か何かを用意してつて、お願いしたぐらい。まさか、本当にそんな一人がいるなんて思わなかつたから、きっと創作なんだろうなって思つてた」

「……ところが、何の偶然か、本当のことだと、今知つてしまつた、か」

「だつて、信じられないぢやない。私が書いた本が、すぐ幸せな恋人達を生み出したなんて……それは、一人の小説家として、特に恋愛小説を書く人間にとっては、もう夢に見ることさえ憚られるほどの、すごいことなんだよ?」

なるほど。だから、嘉納は泣いたのだ。

悲しかつたわけではない。自分の書いた小説が、人を幸せにした。そのことが、彼女にとつては涙を流すほど嬉しいことだつたのだ。作者冥利に尽きる。否、そんな生ぬるい言葉では言い表せないほど、嘉納は二人の存在に打ち震えた。

「その感想文を書いた人間が、まさか付き合つことになつた人つていうのも、もう、出来すぎた運命にしか思えないよ……」

嘉納はそれだけ言つて、再び涙を零した。

出来すぎた偶然なら解るが、出来すぎた運命という表現を聞いたことはない。

そもそも、出来すぎている偶然を運命と呼ぶのだから、運命の中でもさらに出来すぎているともなれば、最早、それは御都合主義といつ陳腐なものになつてしまつ。

あまりにも、鷹成と雪吹さんは出来すぎた偶然の末に、恋人になつた。ならば、僕たちは、出来すぎた運命の果てに、今立つている。

「……嘉納。妙と呼んで良いか。いや、そうだな、お妙と呼びたい」

「ふえ……いきなり、だね」

「運命論者ではないのだけど、運命という響きに憧れの気持ちが無

いわけでもない。ここまで運命に出会ってしまったからには、少しほの運命に翻弄されたくなる

「……それで、なんでお妙なの？」

「今まで、そんな呼び方をしたのは僕だけだろう。僕は、呼び方一つだけでも、君の特別な一人になりたい」

熱に浮かされた言葉というのは、後から思い出すと恥ずかしいのだろうなんて思いながら、それでも僕は真顔で呟いていた。

「……お妙、か。いいね、なんだか町娘みたいで、かわいいし」

嬉しそうに笑うお妙を見て、僕はつい理性や状況を省みずに、彼女を抱きしめ、唇を奪っていた。何故、そうしたのかはわからない。ただ、僕たちは不思議な運命に負けないぐらいに、大きな絆で結ばれているんだと、そう思いたかったのかもしれない。

結局、鷹成達にお妙のことを伝えるのは、先送りにした。

お妙が止めたのだ。できれば、報せないでいてほしい、と。理由までは教えてくれなかつたが、お妙にとつて、二人はあまりにも大きい存在だったのだろう。

ふと、回想を終えて、目を開く。鷹成と雪吹さんの新居。隣にはお妙がいる。

「そういえば、嘉納さんも小説が好きなんだよね。どんな本を読むの？」

沈黙が少々気まずかつたのだろうか。鷹成は話題転換とばかりに、お妙に話を振った。

それがまた小説のことだから、いよいよ鷹成は小説馬鹿だ。もはや、書痴と言つても差し支えないほどに。

「うーん。読むのも好きだけど、本当は書く方がメインなんだ。そうだ、よかつたら読んでもらえないかな。持ってきたんだ」

お妙は軽い調子で言いながらも、表情を少し堅くしていた。

がさがさと分厚い紙の束が鞄から取り出されて、鷹成の手に渡る。「へえ、文芸部にいたけど、書いている人に会うのははじめてかもしれないなあ。ええと……ん？」

鷹成が小説を受け取って、首をかしげる。見やると、一番上の紙にはタイトルがなく、ただ、伊達倭という著者名だけが書かれていた。その名前は、一人にとつてあまりにも大きな存在だろう。

「ふむ……まさか、とも思うが。いや、やはり偶然か、或いは洒落の類だらうか」

雪吹さんも表紙を覗き込み、見慣れすぎたであらう名前に首を捻る。

なるほど、報せてしまうのか。そう思いながらも、続いて出てくるお妙の言葉に、僕ですら少々、面食らつた。

「一人に、タイトルを決めてもらいたいの。全部読まなくていいよ。ぱらぱらと流し読みしてくれれば、どんな話か、わかるはずだし」

小説家は奇人揃いだと聞くが、なるほど、その通りらしい。

訝しげな顔をしながらも、言われたとおりに流し読みしていく鷹成と雪吹さんの表情が、みるみる真剣なものになっていく。

内容など、見なくともわかる。そこに書かれていることは、一人にとつてはあまりにも身近といつも、一人そのものだから。

「『恋』っていう小説の、感想文の中に、恋を知らない二人のエピソードを綴つたものがあつたの。それを読んで、お話にしてみようと思つたんだけど、本人の許可はいるかなつと思つて」

お妙の言葉に、鷹成と雪吹さんの視線が僕に向く。

「賞を取るために、感想文の数は多い方が良い。お妙と出会つたのは、偶然さ」

それだけ言うと、一人は揃つて神妙な顔になり、再び小説に目を

落とした。

しばらく、鷹成達は無言だった。ただ、最後のページをめくった後に、お妙に向かって、一人拗つてぺこりと頭を下げた。

「どう言えばいいのかな。自分たちが小説になるなんて、思つてもいなかつたから」

「そう、これは不思議な感覚だ。まったく、妙はいつも、私たちを不思議な感覚にさせてくれる」

一人は、決して嫌がつているようではなかつた。お妙はほつと胸をなで下ろし、笑顔になつた。

「一人に、小説のタイトルを決めて欲しいの」

なるほど。そういうことだつたのかと、僕が一人で得心した。

お妙が、今になるまで鷹成達に会おうとしなかつたのは、この小説を書いていたからだつたのだ。受験もあるだろうに、こればかりを書いていたのだろう。

一人へのプレゼントになるのだろうか。御礼と言えばいいか。いや、ただ書きたかつただけなのかもしれない。何にせよ、お妙らしいと思つてしまつた。

「ふむ。名付け親か。本来ならば苦心して考へるべきなのだろうが」

「うん。あのときの言葉しか、出てこないね」

一人は示し合わせたかのように、微笑んだ。

お妙の表情がぱつと色づいていく。僕もきっと笑顔なのだろう。少し間をおいて、鷹成と雪吹さんは同時に、この出来すぎた運命の物語の名前を言った。

「本からみつける恋の文字」

## 過去から繋がる妙な縁（後書き）

「本からみつける恋の文字」の外伝。不破を主軸に据えた恋物語にしようと思ったのですが、色々と考えた結果、こういう形になりました。

ちなみに、繋がりを持たせようとして、少々恥ずかしいながら、嘉納妙のペンネームを伊達倭と、私のモノにしましたが、流石に一緒というのもアレなので、読み方だけを変えました。

嘉納妙 ダテシズカ  
作者 ダテヤマト

まつたくの余談ではありますが、作者は男で、正伝も恋人の親友の話を元にしたわけではありません。

遊び心と受け取って頂ければ、幸いで御座います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3209e/>

---

恋からみつけた妙な縁

2010年10月8日13時09分発行